

アートにハツと 港町ワクワク

神戸市などが主催するアートイベント「神戸ビエンナーレ2011」が、神戸港周辺4会場が始まった。隔年開催の3回目となる今回は、部門ごとの公募展を中心に据え、国内外から広く作品を募った。アート作品との出合いを通して、港湾都市・神戸の魅力を見直し、再発見してもらおう狙いだ。

コンテナ国際展

神戸ビエンナーレの大きな特色が、輸送用コンテナを使った公募の「アートインコンテナ国際展」。野外に置いた幅2・4m、高さ2・5m、長さ12mのコンテナ内に自由に作品を制作するが、今回は東日本大震災の影響で資材が不足。神戸ハーバーランドの商業施設にコンテナと同サイズの空間25室を設けた。

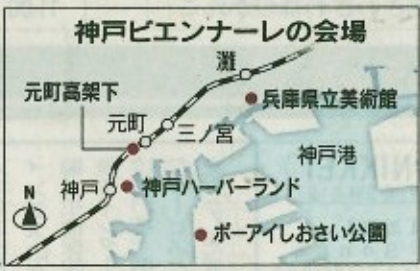
アートグループ、OXOXO「アロバイアロ」の「White Dots Room」は、室内に鏡を張り巡らした。足を踏み入れれば、流れる映像とともに自分の姿が反射し、歩くほどにゆがみ、変化する。狭い室内とは思え

第3回神戸ビエンナーレ、4会場で開催中



ビエンナーレ

ちょっと 隔年開催のアートイベントのことで、イタリア語の「2年に1度」の意味から。3年に1度なら「トリエンナーレ」。都市の活性化や観光客の増加が見込めるため、近年、国内外で開く自治体が急速に増えている。国内では横浜トリエンナーレや越後妻有アートトリエンナーレが有名で、関西では滋賀県近江八幡市のBIWAKOビエンナーレ、大阪市の堂島リバービエンナーレなどがある。



OXOXO「White Dots Room」(写真上、神戸ハーバーランド)と、松井紫朗「Channel-zoom in」(同下、兵庫県立美術館)

ない。巨大な万華鏡に迷い込んだかのようだ。

村上知亜砂「道のり」は天井から無数のジュートのひもや織物が垂れ下がる。「ブラジルでジュート栽培を成功させた移民たちの苦難の道のりをイメージした」と村上。藤木隆明らの「人工地形」は、やわらかな素材を積み上げた憩いのスペース。西村拓紀・小菅大地「LIKE NATURE」は暗闇で発光体のオブジェが浮かび上がる。

密閉された空間の壁や床をいかにつまぐ使うかが作品の成否を分けたが、光や映像を使うなど、どうしても似た趣向の作品が多くなるのが気になった。

兵庫県立美術館は「招待作家展 REFLEXIONEN」を開催。日独交流150周年に着目し、両国の現代美術の作家4人の作品を集めた。

松井紫朗の「Channel-zoom in」は館内の回廊の内壁をナイロン素材の布で覆ったインスタレーション。膨らんだ風船のような回廊を巡る。「(回廊そのものが作品となる)パラドックスを楽しんでほしい」と松井。他に、今月亡くなった元永定正やドイツのオットー・ビーネ、ユリウス・シューミールらの作品を展示する。

空き店舗を利用

広大なポアイしおさい公園では、公募の「しらいアート国際展」を開催。21のインスタレーション作品が野外に並び、関口恒男「ポートアイランドレインボーハット」は太陽光を

取り込み、虹の各色に分散してみせる。沖津雄司「views ensemble」は1000個以上のガラス玉を円形に組み合わせた。藤江竜太郎「GOLDEN ZERO」は地上に張った直

径十数mの巨大な金箔が太陽光を反射する。

このほか、元町高架下では公募展「高架下アートプロジェクト」を開催。厚さ5mの石材を無数に積み上げた北川太郎の一時空ピラミッド」など、商店街の空き店舗に13作品が並び、全体として、来場者をいかに驚かせるか、考えさせるかに徹した作品が大半。テーマパークのような感覚で楽しめるはずだ。会期中は会場間をシャトルバスや高速船が運航する。「街に密着した作品を通して、神戸の新しい魅力を発見してほしい」と大森正夫エグゼクティブディレクターは話す。会期は11月23日まで。(大阪・文化担当 田村広済)

創